

ACCU Nara

International Correspondent

Vol.19 2017

The Eighteenth Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

バングラデシュ



カンタジ寺院（ディナジプール県）の壮麗なテラコッタ美術

ナヒード・サルタナ 地域事務所長

文化省 考古局

フィジー



フィジーの聖なる海洋遺跡：目録作成中

エリア・ナコロ 部長

フィジー博物館 考古学部

インド



ハイデラバードにあるオスマニア女子大学（元英国総督官邸）の
伝統的マドラス風テラス屋根の修復

クンクマ・デヴィ・キショレ 建築士・修復コンサルタント

グッド・アース事務所

モンゴル



モンゴルにおける新発見の文化遺産遺跡

ムンフトルガ・リンチンホロル 研究員

モンゴル科学アカデミー 歴史考古学研究所

ウズベキスタン



2015年~2016年のダルヴェルジン・テバ遺跡での新発見

アクマル・ウルマソフ 主任専門研究員

ウズベキスタン科学アカデミー 芸術学研究所

Bangladesh



Kantajira Temple (Dinajpur District) Beautiful Terracotta Art

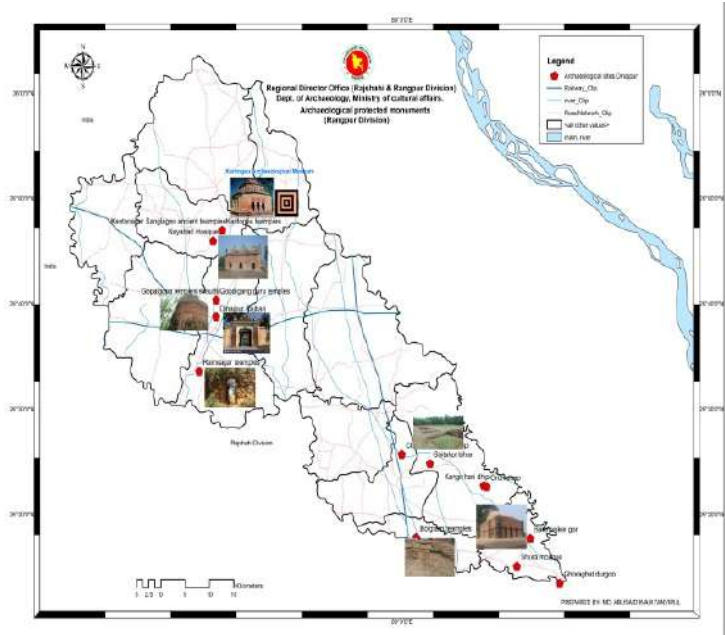
Nahid Sultana Regional Director
 Ministry of Culture Archaeology

はじめに

Dinajpur District is located in the north of Bangladesh. Kantajira Temple is located on the west bank of the Pranabudra River (locally known as 'Daba') about 22km north of Dinajpur City. Kantajira Temple is a Hindu temple of the late medieval period. In 1704, the famous landowner Pranab Nath Roy started the construction, and in 1752, his son Ram Nath Roy completed it. Both were powerful feudal lords of Dinajpur District.



Bangladesh map. Location of Dinajpur District (red area).



Dinajpur District map. Kantajira Temple and other monuments. (Provided by A.I. Tanvirul Islam, Director of Archaeology, Bangladesh)

歴史概要

Anciently, this region was the territory of the Pundravardhana Kingdom. The capital Pundrava was located 18km south of Dinajpur District. Therefore, Dinajpur District was one of the most prosperous regions in ancient Bengal. Moreover, Kantajira Temple was one of the major temples in the Kantanagara Fort. The fort was 15km² in area, surrounded by a 4m high wall, and a 15m wide ditch. (Zakaria 2011, 1989). Inside the fort, there were many archaeological remains of Hindu and Islamic architecture. Some of the buildings are still remaining.

ています。ヒンズー教徒の大地主は、宮殿や寺院や門などを建設し大きな池を造成しました。バングラデシュ政府考古局は、遺物法 1968（1976 年改正）に基づきカンタジ寺院を保護記念物と認定しました。

カンタジ寺院は、壮麗なテラコッタ美術界のなかでも傑出しています。3 階建ての寺院は、壁の両面、柱、アーチ通路、コーニス（軒蛇腹）、屋根にいたるまで余すところなく装飾されています。テラコッタ額はとても小さく、様々な形をしており大きさもまちまちです。古代ベンガル時代のこれほど美しいテラコッタは他にはありません。「今ではラトナ（装飾用小塔）は、失われてしまっているが、カンタジ寺院は小尖塔のあるインド・イスラム様式のナバ・ラトナ寺院である。寺院の設計、技法、装飾は中世後期の寺院様式の真髄を伝えている。カンタジ寺院は、上から下までテラコッタで装飾された表現力あふれる壮麗な記念物である」（Hoque and Hoque 2005:118）。



最近のカンタジ寺院

構造

カンタジ寺院は、平面正方形で、高さ 1 m の切石積み基壇の上に建てられています。地面からの現存高は 21.33m。基壇の一边は 18.28m で、建物と同じく平面正方形をしています。建物の一边は 15.54m です。建物内四周は幅 2.43m の回廊になっており、外壁四面の中央にはそれぞれ、大柱 2 本と片蓋柱 2 本の上に 3 連アーチを架けて、大きな出入口口 3 つが設けられています。

入口への通路は、2 つの中央アーチで支持するように建造されています。寺院の本堂は極端に狭く、内部には、カンタジ像が祀られ、これを囲むように小部屋が配されています。この寺院はドルマンチャ寺院と

同じ形で建設されました。2階部分は1階より小さく部屋はありません。そして同じように最上階の3階部分は2階より小さいのです。9基の小塔のうち、4基がそれぞれ1階と2階の屋根の角に建てられ、最上階には1基だけです。しかし、この9基の小塔は1897年の巨大地震でひどく損傷し、寺院も甚大な被害を受けました。



カンタジ寺院の柱、ピラスター（片蓋柱）、アーチ



1897年以前撮影のカンタジ寺院の希少な写真。



カンタジ寺院の現在の状態。

テラコッタ美術



王族の旅行



戦争に向かう遠征隊



ムガル帝国時代の政治社会生活



王族の船旅の様子

高名な歴史家ジェームズ・ファーガソン氏は、カンタジ寺院の曲線様式を高く評価しました。「カンタジ寺院こそが、この様式（曲線様式）の最もよい例のひとつであろう。9基の小塔で飾られた、心地よく美しいデザインの大寺院である」（Zakaria 2007:126）。同氏はテラコッタ美術について次のようにも述べています。「寺院に石は全く使用されていない。表面はすべてテラコッタ装飾で埋め尽くされており、一部は様式化された図案が繰り返し現れるが、鑑賞の妨げになるほどではない。大半は人間がテーマで今までにない 18 世紀のベンガルの人々の生活様式、風俗、衣装が余すことなく描写されている」（Hasan 1970:144, Zakaria 2011:127）。

カンタジ寺院の特筆すべき特徴は、テラコッタ装飾美術です。最も有名な叙事詩ラーマーヤナやマハーバーラタの物語やムガル軍遠征の様子が、美しく連続して寺院本体を装飾しています。その他には、18世紀のベンガル人の社会生活なども表現されています。貴族の生活の様子が、船やパランキーン（旅客用一人乗り籠）で旅を楽しむ姿、狩猟の場面、様々な儀式などを通して描かれており、訪れる人々の注目を集めています。テラコッタ飾り版の画像は他の寺院には描かれていません。寺院の一番下から屋根まで彫刻された画像は、他とは全く性質が異なります。「カンタナガルにあるナバ・ラトナ寺院のような装飾では、3つの階すべてのアーチ通路やアーチ形天井や柱をはじめ、内も外もすべての壁面はどこも小さ

な像やモチーフであふれるばかりに装飾されている」(Ahmed 1984:115)。

テラコッタ装飾は非常に素晴らしく、1752年以前に製作されたにもかかわらず、今も損なわれることなくあざやかに輝いています。何度も地震などの自然災害に見舞われて、寺院自体はひどく損傷しましたが、テラコッタ装飾は粘土と土で作られているにもかかわらず比較的よい状態なのです。



庶民の日常生活



庶民の日常生活



左側には女神カーリーとラクタヴィージャの戦い、右側には女神チャンディとオスラの戦いが描かれている。

生きている寺院

ヒンズー教徒は毎日この寺に参拝します。1ヶ月続くラシュメラ祭りは、ベンガル暦の11月にカンタジ寺院で執り行われます。国内外から何千人もの人々が、このお祭りにやってきます。スリキータナ（神への賞賛）が、毎年ベンガル暦1月満月の日に聖浴祭として行われています。ドル・ペリマ（またはドル・ジャトラ）は、ヒンズー教の大事な祝祭です。この祭りは、クリシュナ神とその愛人ラーダーに捧げられます（ヒンズー教の神と女神の礼拝）。


最後に

古代ベンガルの建築様式と装飾は、歴史上特別な重要性を有しています。ベンガルでは、石が利用できなかったため、人々は粘土を建築材や日用品の材料として使用してきました。はるか昔から、粘土で住居、台所用品、神像や女神像、寺院、日用品そして玩具なども作りました。「これら中世寺院の素晴らしい特徴のひとつは、人間や花を主題としたテラッコッタ彫刻がはてしなく続く壮大な壁面装飾である」（Ahmed 1984:114）。中世後期の寺院の例としては、シラジガンジ県にあるハティクムル・ナバラトナ寺院、ラジシャヒ管区のプティア寺院群のボロゴビンダ寺院、インドベンガル地方のヴィシュヌプル寺院群などがあげられます。結論としては、中世後期の寺院建築はベンガル地方（西ベンガル州とバングラデシュ）において、隆盛の頂点に達したと言えるでしょう。カンタジ寺院は、中世後期の建築様式の最良の例と言えます。

参考文献

1. Prof. M.M. Hoque and Dr. Seema Hoque, Kantajee Temple An Outstanding Monument of Late Medieval Bengal, published by UNESCO Dhaka, House no.68, Road 1, Banani Dhaka-1213 Bangladesh.
2. Abul Kalam Mohammad Zakaria, Bangladesher Pratinashampod, Divya Prakash, 38/2 Banglabazar, Dhaka. 2011.
3. Abul Kalam Mohammad Zakaria, Dinajpur Museum, 1998.
4. Dr. Syed Mahmudul Hasan, Ancient Monuments of East Pakistan, Pakistan Academy, Abdul Gani Road, Dhaka-2, 1971.
5. Dr. Nazimuddin Ahmed, Discover the Monuments of Bangladesh, University press Limited, red Cross Building, 114-Matijhil C.A. Dhaka2, 1984.
6. Update Survey Report of Rangpur Division, 2017.
7. Photographs by Abul kalam Azad, Photographer and Murad Hossain, Sub-assistant Engineer, Department of Archaeology, Rajshahi Division.

フィジー

	フィジーの聖なる海洋遺跡：目録作成中
	エリア・ナコロ 部長 フィジー博物館 考古学部

(前半部略)

海洋文化遺産データベース

フィジーは、太平洋地域の中では開発が進んだ国ですが、そのために歴史や独自性に関する重要な文化的特性が失われたり、破壊されたりすることもあります。フィジー博物館考古学部門には、限られた財源と人材しかありませんが、そのような脅威から国家文化遺産を保護する最前線に立っています。現在、考古学部は、以下のような6種類のデータベースを管理しています。

1. 陸上の文化遺産
2. 伝統的海洋文化遺産
3. 難破船
4. 考古学調査出土資料
5. ラピタ遺跡
6. 口述歴史録音史料

考古学部の倉庫に保管されている考古学調査出土資料と口述録音史料は、マイクロソフト・アクセスで管理しています。

一方、陸上の文化遺産、海洋文化遺産、難破船およびラピタ遺跡については、地理情報システム(GPS)プログラムの ArcGIS を使用して管理しています。含まれる情報に空間属性があるため、ArcGIS が適しています。それによって、文化遺産の保護についての体系的記録、情報分析、地図作成および政府機関とのデータ共有が可能となります。

考古学調査が終わるごとに、職員は全地球測システム (GPS) を使用して、各遺跡を記録します。GPS データは、報告書作成のために転送され、また国内登記簿 (データベース) にも対応しています。このデータベースは、意思決定の際や、割り当てられた地域内に文化遺跡がある国家開発事業を担当する官庁への助言などに、大変役に立ちます。

少人数の職員で国内すべての考古遺跡を担当し、ArcGIS で4件のデータベースを個別に管理するとなれば、部門長ひとりが重責を担う困難な仕事となります。人材が限られており、職員の能力は低く、集中管

理システムがないとなると、データベースの更新はいつも遅れがちになります。理想を言えば、考古学部門が管理する膨大な情報は、一個のデータベースで管理されるべきです。それぞれのデータベースは主題が違うだけで、様々な調査遺跡から得られた情報は、共通座標を共有しているからです。

2017年6月、フィジー博物館はすべての部門を集中管理できるサーバーを導入しました。これは、博物館にとって大きな進歩であり、各部門は個別に同じ内容のデータベースを管理する必要がなくなりました。サーバーの基本機材を設置後すぐに、考古学部門では、職員のために1週間の人材養成研修を実施しました。研修内容は、通常の調査法による野外地図作成法、GPSおよびGISの使い方、マイクロソフト・アクセスを使用したデータベース管理法などです。この研修によって、職員は共通ホルダーにあるデータベースを適宜必要に応じて更新できるようになりました。部門長は時間に余裕ができ、大いに生産性改善につながりました。

4種類のデータを統合することは、効率よくデータベースを管理するために、都合がよく必要でもありません。陸上文化遺跡、海洋遺跡、難破船、ラピタ遺跡の4種類の項目が、考古学部門の職務として、等しく表示されるのです。

フィジーの水中文化遺産の保護に関する法律

現時点で、最も重要な包括的法律である POAPI 法 (考古学および古生物学の重要遺物保存に関する法律) には、水中・海洋文化遺産の保護については、わずかな規定しかありません。しかし、水中遺跡を含む文化遺産を保護するという目的を共有している機関や団体があるのは、心強いことです。過去には、それらの機関は、国をあげての海洋保護地域推進に後押しされて、持続可能な海域監視と食料供給と輸送手段としての海洋資源の利用に向けて、自国の排他的経済的水域内で活動をしてきました。気候変動緩和に向けての世界的関心が高まり、フィジーが加盟している様々な条約や協定などが、これらの機関の行動をうながしたのです。政府、市民団体、地域団体を含む以下に挙げる一覧は、海洋保護地域の保全の最前線に立っている組織です。

政府機関

1. フィジー海洋保安局 (MSAF)

フィジー海洋保安局は、フィジー国内の、船舶登録、規制、海運業の安全および航路などの業務を担当しています。国際海事機関 (IMO) は、国連特別部局であり、船舶の安全と船舶による海洋汚染の防止のための機関です。フィジーはその加盟国として、重要な2海域の国際的認知を確実にするために努力しています。その地域が環境上、社会経済的に、文化的および科学的要因から、国際的海洋活動による被害を受けやすい、つまり特別敏感海域 (PSSA) と認められることを目指しているのです。

フィジーの港のなかで、2港が特別敏感海域の基準を満たしていると確認されました。それによって、海洋文化重要海域を保護するための法規制がさらに充実するでしょう。ベカ海峡とブダ海峡には、難破船や壊れやすい文化遺産が沈んでいるかもしれないので、保護申請をする必要があります。考古学部門は、特別敏感海域のための専門委員会に新たに加わりました。2017年7月14日、第2回専門家会議が開催

され、利害関係者が多数出席しました。専門委員会の業務はまだ初期段階で、情報を収集し、報告書を提出しただけです。

2. 政府環境局 (DOE)

環境保護と国内開発事業の規制を任務とする環境局は、環境管理法(EMA-2005)にのっとり、沿岸文化遺跡の保護に重要な役割を果たしています。2017年7月、国立博物館は、第二次世界大戦中に建設された3棟の見張り台の保存について、環境局から相談を受けました。防波堤建設に関わる開発事業によって、危険な状況にあったのです。

3. フィジー共和国軍傘下の海軍

海軍は、海洋上の国境管理を業務とし、排他的経済的水域の監視や救助活動などを行っています。他国の海軍と同じように潜水チームがあります。最近(2017年)では、海域内で潜水調査の先頭に立ち、大型の箱を7個発見しました。大箱には、武器弾薬が詰まっていると信じられていましたが、非公式情報では、第二次世界大戦時の機雷とも言われています。フィジー博物館は、大箱の内容物を確認するために、引き続き警察機関と緊密に連携していくつもりです。

4. イタウケイ事務局 (iTAB)

イタウケイ事務局は、フィジー先住民(イタウケイ)に関するすべての業務を担当する、政府行政機関の1部門です。フィジーの固有文化と伝統を守るという重大な使命を委託されている事務局が、海洋遺跡の重要性を認知していることは、きわめて心強いことです。すべての聖なる遺跡は、先住民が起源なので、事務局は、無形文化財保護のために法律の専門知識も援用しています。

非政府組織

5. 国際自然保護連盟 (IUCN)

フィジーのスパに地域事務所を設置し、フィジーをはじめ太平洋地域の保護活動に深く関わっています。さらに、政府と合意書を交わし、環境保護のために助言を与え、法律、政策、条約などの再検討に関わっていくことを約束しました。2016年、IUCNは、(ほとんど見落とされてしまう)文化遺跡を、海洋保護地域のリストに登録し、その際にはフィジー博物館に情報提供と助言を求めました。

地域団体

6. 太平洋共同体事務局 (SPC)

水中調査のための専門知識と道具を備えています。SPCには、太平洋地域の文化財保護を専門とする部門があり、水中文化遺産の重要性をよく理解しています。

上記の組織や専門機関は、フィジーの水中文化遺産の保護を推進するという目的を共有しています。フィジー博物館は、水中文化遺産保護における当館の役割と機能を彼らに知ってもらう必要があります。考古学部門は、水中文化遺産の重要性を広めるロビー活動を行い、すべての利害関係者の協力を要請する必要があります。

聖なる海洋遺跡

フィジーには、多くの伝統的文化遺跡や慣習がありますが、科学知識では説明できないものばかりです。60年代初めに、BBC ドキュメンタリーのレポーターを務めていたアッテンボロー氏の試みは失敗でした。ペカの炎の上を歩く人、コロの海亀への呼びかけ、バヌア・バラブ島の湖に生息する魚など、フィジーの不思議な習わしを、科学で説明しようとしたからです。

図1は、考古学部がデータベースに登録済みの、尊敬を集める魅力的な海洋遺跡を示す地図です。

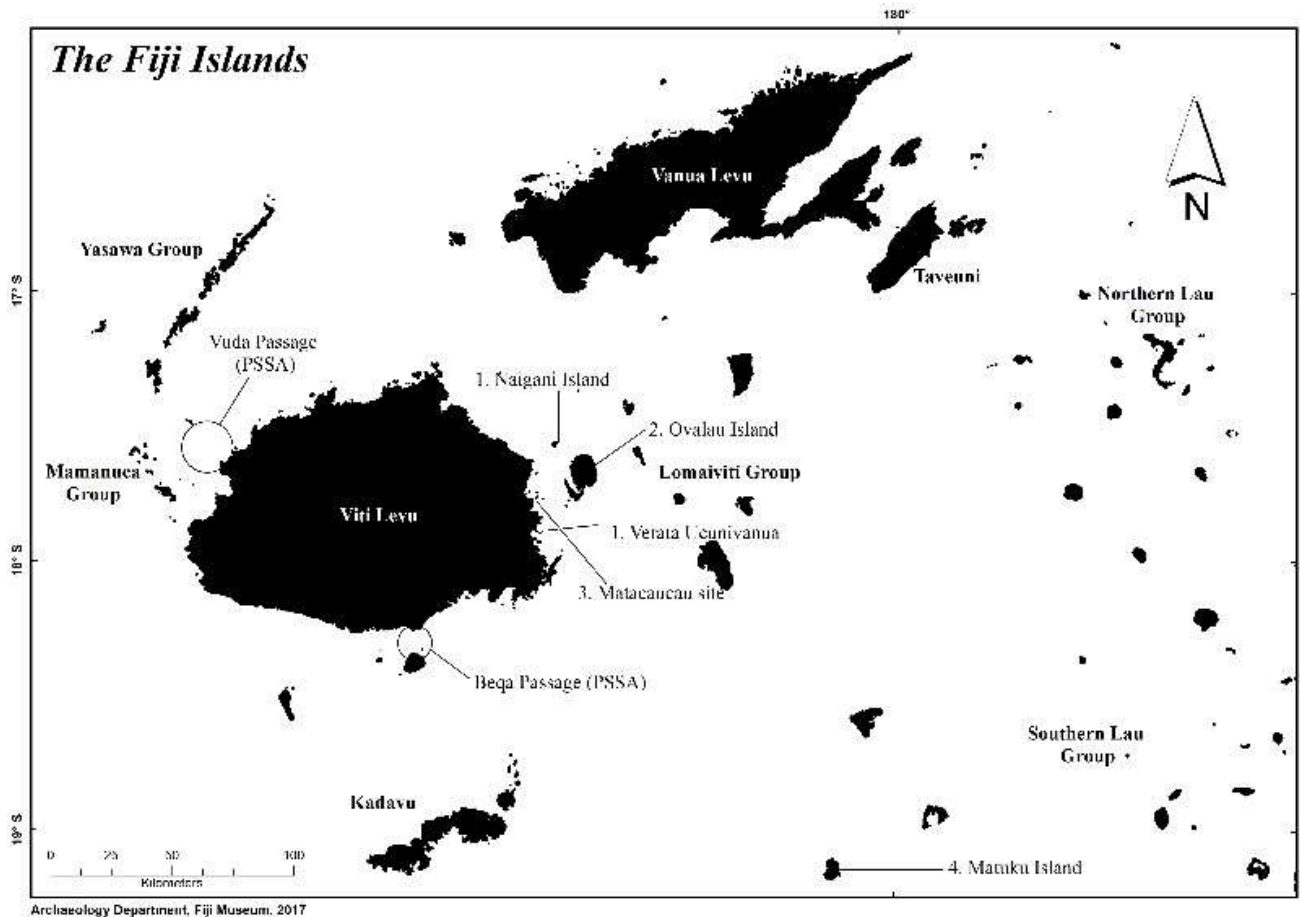


図1 聖なる海洋遺跡の項で言及した遺跡の名前を示す地図

1. ナイガニ島の聖魚

ビティ・レブ本島の東海岸に、ベラタの最高族長であるロコモウツは、伝統的尊称「ラツ」を有していました。最初のフィジー人が、アフリカのタンガニイカ湖を出てフィジーへと旅立った時、族長の娘が、ペットの魚を連れて行きたいと頼みました。フィジーではダニバ（イワシ）と言われるこの魚は、その娘によって、ベラタの海にもたらされたのです。魚を捕る時は、やすで突いたり、目の細かい網や釣り竿を使うことは禁じられていました。普通、アジはダニバ（イワシ）の後ろを泳ぎ、後ろからイワシを海岸近くへと押しやります。その飛び跳ねる音を聞いて、人々は海岸へ行ってダニバ（イワシ）を手でつかみ取るのです。

ある日、ロコモウツは、やすで魚を突こうとしました。投げたやすは魚にあらず、岩に突き刺さり、彼も岩で膝を強打しました。(岩には、やすの跡と膝のぶつかった痕跡は今もはっきりと残っています。) 激怒したロコモウツは次のように、魚に言いました。「バツナワ (現在のナイガニ) へ行け。そうすれば、おまえを見ることもないし、おまえのたてる音を聞くこともない。煮え湯を飲みたくなったら、そこに行くぞ。」

ナイガニの住民は、イワシと共に海岸近くに泳いできたアジも捕まえました。古代スカンジナビアのトールと山羊の民話に似ているのですが、アジを食べる時には骨は砕いてはいけません。残った骨をゆっくりと海へ戻すと、魚はまた生命を取り戻すのです。ナイガニの住民は、再生したアジを容易に見分けられると言います。この伝統的習は、今も行われています。

2. オバラウ島とナイガニ島を結ぶ聖なる水路

ナイガニで収集された口承伝説です。ラギニワサと、いとこのラカボノという名前の青年がいました。ある日、二人は、先住民の言葉で「バラ」といわれる未熟なココナツヤシの実を食べました。それは、ラギニワサの父親であるマタナバラブ酋長が植えた木でした。酋長の足音を聞いて、ラギニワサは逃げだしましたが、実を食べたことが見つかってしまいました。激怒した酋長は、息子を島から追放しました。ラギニワサはカヌーで、オバラウ島の南にあるマツリキ島へ逃げました。

数日後、マタナバラブ酋長はラカモノにも、島を去るように命じました。カヌーを持たなかったラカボノは、オバラウ島の北西海岸にあるルクルクまで泳いで渡りました。口承伝説によると、ラカボノは、約8 kmの暖かい水路を泳いだと言われています。同じ水路をナイガニとオバラウの漁師たちが補助具なしで泳ぎ、暖かくて浮力が増したが海水は冷たかったと語っています。彼らは、ラカボノが泳いだ水路をたどったとは言えません。

3. マツクの聖なる石

マツク島は、ビティ・レブ島の南島部のラウ諸島に位置し、ラウ諸島のなかで唯一エネレ・マーフオウトンガ王子の指揮するトンガ軍に征服されなかった島です(1840年代頃)。マツク島の東の端に、満潮になると水中に沈む大きな石がありました。赤みがかったほぼ長方形(1×1.5m)の石で、レブカイダク村付近の海岸にありました。その大きな石はレブカイダク村と隣のラビラビ村との伝統的関係をよく表しています。両村の口承によると、ラビラビ村の住民がその大石のそばを通るとすぐに、巨大な津波が起こったと伝えられています。その石から20mほど西にある少し小さい赤みがかった石も、無礼な言葉や扱いを受けると、同じように巨大な津波を引き起こしたと伝えられています。巨大な津波は、あるレブカイダクの一族¹が、その赤い石を特別な木の葉で覆って、儀式を執りおこなわないかぎり静められませんでした。

4. マタカウカウの蚊が潜む聖なる岩の割れ目

ビチ・レブ本島の東海岸沿いに、神秘的な海洋遺跡があります。高潮線の跡のついた断崖のふもとに、カラニナムと呼ばれている岩の割れ目があります。カラとは開口部、ナムは蚊のことです。カラニナムにま

つわる不思議な物語があります。カラニナムは、ナカムバドラの丘から移住してきた集団の指導者ロコモウツからの贈り物だというものです。ロコモウツがベラタ・ウクバヌアに向かって航海している時、強風が吹いて帆が破れてしまいました。帆の修理のために避難した彼は、そこで助けてくれた住民に蚊を入れた包みを贈ったのです。それは、ツラガ・ナ・ラツへの贈り物として持参したものでしたが、助けてくれたマタカウカウの住民に感謝のしるしとしてプレゼントしました。

マタカウカウには、カラニナムを乱すと、恐ろしい結果に苦しむという言い伝えがあります。虫除けや蚊帳で防げないほどの大量の蚊が、群がって村を襲うというのです。次のような話も伝えられています。祝祭儀式の際に、若い男達がわざとカラニナムをかき回し、来訪者（特に女性）が、一晩中眠れないようにしたというのです。

最後に

太平洋諸国の住民は、海と深く関わって生活しています。海は、生命の源であり、島を結ぶ移動手段でもあり、人々の暮らしを支えています。太平洋諸国の歴史は、海の利用と関わってきました。そして、その歴史の一部は、現在水中にあるのです。

フィジー諸島には、海に関連した歴史遺跡が散在しています。人材も財源も不足していますが、フィジー博物館は、ゆっくりとではありますが確実に歩み続け、水中文化遺産の記録化を進めるつもりです。水中文化遺産保護の重要性への認識を高めるために、政府機関や非政府機関の人々と協力していきます。

参考文献

1. Gatty R, 2009. Fijian-English Dictionary with notes on Fijian culture and natural history. Publication under the auspices of the Southeast Asia Program, Cornell University, New York.
2. Government of Fiji, 1940. Chapter 264: Preservation of Objects of Archaeological and Palaeontological Interest in Laws of Fiji. Government Printery, Suva, Fiji Islands, P 2
3. Nakoro E. 2014. The Fiji Museum's Efforts Towards the Preservation of Underwater Cultural Heritage Sites in Fiji, Session 3, Underwater Cultural Heritage, Museums, and Sustainable Development, the Proceedings of 2014 Asia-Pacific Regional Conference on Underwater Cultural Heritage, May 12-16, Honolulu, Hawaii. Pp 99-112.
4. Nakoro E. and Matararaba S. 2014. Archaeological Assessment Report: Report prepared for the Vanua of Waimaro Levulevu specifically for the villages of Verata Ucuivanua and Matacaucau, Fiji Museum, Suva, Fiji.
5. Ramoli A. and Nunn P. 2001. Naigani Island and its historical connections with Ovalau and Moturiki Islands: convergences between legend and fact, <https://www.researchgate.net/publication/247769057>, accessed on 16 July, 2017. BBC, 1960. The People of Paradise, video, episodes 1 & 2

¹ イタウケイ先住民の伝統的社会的階級構造は、部族(tribe)から始まります。その下に、族(clan),そして家族単位(family unit)へと続きます。ひとつの村は、1または2部族からなり、多数の族がその下部に属します。それぞれの族の下部には数個の家族単位が属します。

インド



ハイデラバードにあるオスマニア女子大学（元英国総督官邸）の 伝統的マドラス風テラス屋根の修復

クンクマ・デヴィ・キショレ 建築士・修復コンサルタント
グッド・アース事務所

はじめに

筆者は第 11 回国際ナショナル・コレスポンデント定期報告書にて、ハイデラバードの元英国総督官邸に関連して、南インドにおけるマドラス風テラス屋根の詳細な調査と分析などを報告しました。元英国総督官邸の修復は、バンガロールにあるヘリテージ・マターズ社がコンサルタント業務を担当し、オスマニア大学、テランガーナ州考古学局、ニューヨークの NGO、ワールド・モニュメント財団などが共同事業として引き受け、資金提供を行いました。修復工事はムンバイにあるジェーノダ修復会社が施工しました。本稿は、テランガーナ州考古学局への修復報告書から写真引用および一部抜粋し、筆者の所見なども加えて作成しました。

建物西側の平面楕円形部屋のマドラス風テラス屋根は、2014 年に崩れ落ちました。雨水から屋根を守るために、テラスに仮設の屋根が建設されましたが、崩壊は避けられませんでした。以前の報告書でも詳しく述べましたが、崩壊の原因はシロアリなどの虫害による梁の劣化、長期にわたるテラスからの水の浸透による梁端の腐食、レンガ壁の上の梁が細く数も少なかったために耐えられなくなったこと、何度も追加耐水工事が行われ屋根が重くなりその静荷重によるものでした。

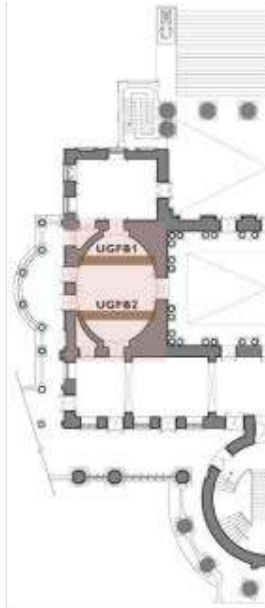
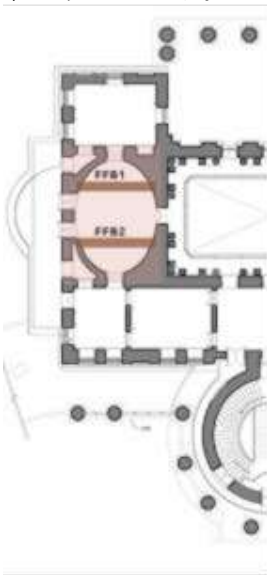


後方から見たパルディオ風（17~18 世紀の英国建築様式）の元英国総督官邸



ブリキ製の仮屋根と劣化した梁を撤去した後に露出したマドラス風テラス屋根

1階上部と2階の平面図。屋根の崩壊時と修復後の梁の位置を示しています。



注意深く屋根部材と梁 FFB2 を解体撤去した後に、楕円形部屋から上を見上げると露出した仮屋根が見えました。梁 FFB1 は完全な形で残っていました。



マドラス風屋根の下の楕円形部屋の天井を支えていた垂木から、薄い鉄板の錆びた装飾部がはがれていました。



梁 UGB2 の代替梁 FFB2 は、いろいろな大きさの部材で補強修理しました。



現場で梁 FFB1 の端部分を SS クランプで補強しました。



新たに調達したチーク材の梁 FFB2



新しいチーク材梁 FFB2 にかんなをかけ加工処理をしています。

梁と部材の再利用と修復

2階の天井を支えていた梁 FFB2 がテラスから崩落し、それによって1階の天井の梁 UGF2 と2階の屋根の一部も崩れ落ちました。大きなチーク材 (0.45×0.35×8.6m) 梁の被害状況は、修復専門建築家や熟練の大工職人チームによって、徹底的に調査されました。超音波パルス速度検査(非破壊検査)を実施し、劣化部位の確認、梁の均質度測定、ひび割れや隆起部および隙間などの検出を行いました。その結果、梁 UGFB2 は、3つに折れていることが明らかになりました。梁を修理して再利用するのは、2カ所の接合部が中央部に近くなるので、梁の強度と重い荷重がかかることを考えると、よい解決策とは言えません。しかし、傷みのない部分は、修復の際に小さな部材が必要となったときには再利用可能でした。梁 FFB2 は、比較的よい状態で、その約4分の3が再利用可能でした。何度も話し合い、正確で詳細な測定をした後で、梁 FFB2 を他の部材で補強し、適当な大きさにして1階の天井梁 UGFB2 と取り替えました。2階の屋根の梁 FFB2 があつた所には、新しい梁を用意しました。

梁 FFB2 の破損部分を切り取り、梁の緩んだ部材、MS 釘、ねじなどを注意深く取り除き、再利用のために保管しました。再利用できる梁の大きさは、0.4×0.3×8.3m でした。梁の修理には、大きさの異なる6本の部材が必要でした。建物解体の際に出た古い部材を切断し、のみで削りかんな仕上げをかけて表面を平らにしました。そして梁をつなぐには、4種の接合技術を使用しました。1) ほぞとほぞ穴 2) ナットとボルト 3) 接着剤 4) SS クランプ (締め具) です。

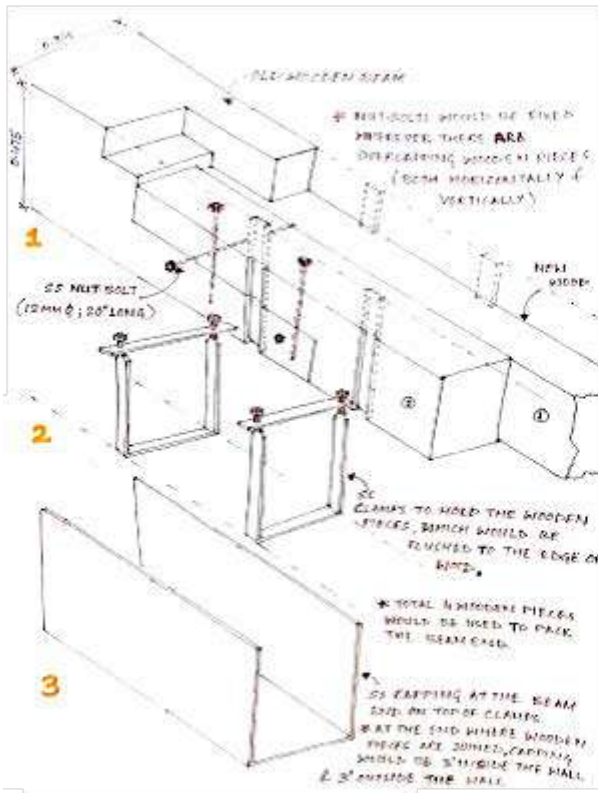
梁に最大強度と安定性を確保するために、この4種の接合法を用いるという最善の組み合わせを選択しました。新旧部材の接合部は梁全体の4分の1におよび、ひび割れや歪みがおこらないようにするためには、耐久性と強度を確保することが必要でした。別の部材を中央の梁に結合するためには、ほぞとほぞ穴が必要でしたが、すべての部材をつないで部材同士の緩みを防止するためには、ねじ、ボルト、SS クランプが必要でした。みぞ部分を含む結合部表面には、高強度半透明のエポキシ樹脂 (アラルダイト) を塗布しました。



ほぞをつけた新しい部材は、梁 FFB2 に作られたほぞ穴に固定されました。

ナットとボルトのついた長さ500mm 直径 12mm の金属棒。部材を垂直・水平両方向で支えるために、1フィート (30.48cm) 間隔で使用しました。

新しい梁 FFB2 と古い梁 FFB2 には、虫害予防薬剤を塗布しました。



新しい梁部材の接合詳細を示す設計図

新しい梁 FFB2 をつり上げて、
所定の位置に設置しました



幅 25.4mm の SS クランプ 6 個を、補強された梁端部の締め具として使用しました。クランプにはさび止め塗料がコーティングしてあります。

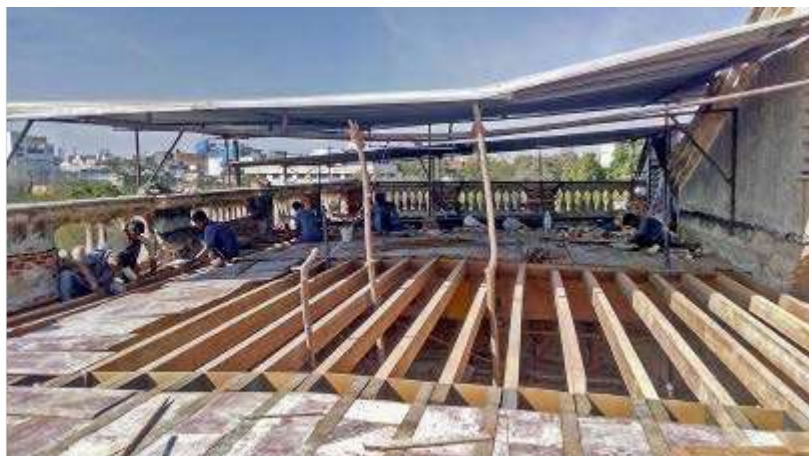
マドラス風テラス屋根の修復（伝統的工法については、第 11 回 ACCU 報告書参照）

西側に位置する楕円形部屋の、マドラス風屋根を支えていた梁 FFB2 と UGF2 が崩れ落ちたことで、屋根の大部分が倒壊しました。その結果、屋根全体の再建が必要となりました。残ったマドラス風屋根を撤去すると、その断面から典型的な工法ではないことがわかりました。伝統的マドラス風テラス屋根は木材構造部材の上に 2 層のレンガ積み層がありますが、ここでは 1 層のレンガ層だけでした。屋根の表面は後の追加工事で施工された、ビチューメン層で覆われていました。その下には、チャドッラビラと言われる $10 \times 10 \times 1 \text{ cm}$ の平らな四角形の粘土タイル層が 3 層ありましたが、再利用のために、ていねいにはがしました。タイルの下にはクッピーと呼ばれる石灰コンクリートの防水層（厚さ 12.5cm）がありました。これも撤去し、その下のレンガ積み部分を慎重に解体し、再利用のために回収しました。梁 FFB1 は現場で保管し、垂木をていねいに取り除いて、損傷した根太を解体しました。そして、屋根の保護のため 4 年前から設置されていたトタン板の仮屋根は、修理工事が始まる前に撤去しました。

マドラス風テラス屋根には、一般建設工事に用いるレンガとは違う大きさのレンガを使用しています。しかし、この大きさのレンガはもう市販されていないので、特注の是非を検討しました。レンガを特注すると長い日数がかかり、品質の問題もあるので、標準サイズ ($22 \times 10.1 \times 8.25 \text{ cm}$) の 1 級レンガをワイヤーカッターで切断して利用することになりました。現場でレンガを水に浸し、注意深く 3 分割して必要な大きさ ($22 \times 3.25 \times 8.25 \text{ cm}$) にします。



劣化した石灰コンクリートと追加防水工事層を注意深く撤去しました。



所定の場所におさまった新しい垂木。その上に薄いレンガ層を敷設する準備が整いました。

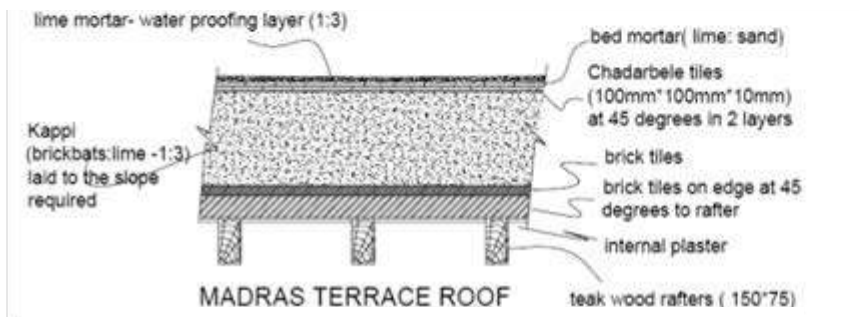
地上で古くて重い梁 FFB2 を補強し準備が終わると、クレーンで西側のバルコニー上部につり上げ、梁 UGFB2 があった場所へと手作業で誘導し、正確な位置に設置しました。古い梁部材を完全に撤去しゴミを取り除き壁の支持部材を準備しました。施工の全工程は、多くの人員、忍耐、正確さを必要とし、統制の取れた動きで作業をこなすことが求められます。梁 FFB2 を取り替えるために調達した新しいチーク材梁は、現場で加工処理を施しました。ゴミを取り除いた後で、壁に十分な支持部材をつけて、設置しました。大工職人らは、梁 FFB1 と梁 UGB1 を現場で補強しました。両梁とも良い状態だったので、小さなひびを補修し緩んだ部分を取り除き、粗い角に磨きをかけ最終仕上げをすることになりました。補強した古い梁には、両端部と中央に SS キャッピングを施しました。梁の端部は、石灰と砂を 1:3 で混合した石灰モルタルのレンガ積み層の中にしっかりと包み込まれました。2 階のマドラス風テラス屋根の全木材構造部材の内、根太は合計 75 本もありました。

劣化崩壊した根太の代わりに新しいチーク材の根太用部材を用意し、認可シロアリ用薬剤をブラシで塗布し、番号と施工日時を記入したシールをつけて、残った根太の間に設置しました。片方の端はレンガ積みの中に、もう一方の端は木の梁の上に寝かせました。その後で、隠れた部分を守るために、チーク材の垂木の上部に、ブラック・ジャパンという腐食防止用の黒いビチューメン塗料を塗布しました。

レンガを敷設するための型枠は、フレーム構造に従って作られました。レンガ積みの第 1 列目は、根太に対して 45 度の角度で縁に沿って並べ、2 列目は 1 列目に対して垂直の方向に水平に敷設しました。2 列目のレンガ敷設は、1 列目とほぼ同時進行で行いました。1 ヶ月以上かけてレンガの敷設が終わり、完全に固定した後で、石灰コンクリートの注入作業を始めました。



標準サイズのレンガを機械で精巧に切断し、小梁に対して 45 度の角度に敷設しました。最後に、天井部分のチーク材根太の間の隙間は漆喰で補修し塗装を施しました。



マドラス風屋根の修復後の断面図

石灰コンクリートもしくは石灰レンガ破片（クッピ）の施工は、伝統的防水技術で、今でも歴史的建造物の防水に用いられています。降水量や入手可能な材料が異なるので、地域によって防水層の厚さや材質は様々です。マドラス風テラスに施工されていたクッピ層の厚さは、平均 12.7cm でした。それは、石灰コンクリート層の上に石灰モルタルで固めた 3 層のチャドッラピラ（10×10×1cm のテラッコッタ製粘土タイル）からなっていました。石灰コンクリートの防水層は、長い年月の間に劣化が進んでいました。構造的ひび割れ、タイルの薄片化、営繕の欠如、雨水のしみ込みなどが原因です。さらに、セメントコンクリート層やビチューメンタールのフェルト材のような不適当な資材を追加して、排水のための勾配を変えてしまい、結果的に様々な劣化の原因となりました。新しい防水層を施工する前に、古い防水層は、金槌やのみを使っていねいに取り除きました。この作業で用いた資材は、焼成水硬化性石灰、レンガ破片（現場で準備）などです。添加剤としては、スルキ（レンガ粉末）、ジャッガリー（ココナツヤシの樹液から採る粗黒砂糖）、大理石の粉、サラス（動物性脂）、水などを用いました。

厚さ平均 17.8cm のコンクリート屋根の再建に要する原材料は、かなり大量で、テラスに持ち上げるだけで、丸 1 日かかりました。消石灰、水、添加剤を混合したグラウチング（注入）溶液が、汚れを取り除ききれいになったテラス表面に均一に注入されました。溶液が、表面にある割れ目のすべてに十分に吸収されたことを確認後、クッピと言われる水硬性石灰とレンガ破片の混合物を敷き詰めます。今回の石灰

コンクリート注入による方法では、1日かけて木の棒で表面を何度も打ち固めます。一晩かけて水分を全部蒸発させた後で、次の日にさらにクッピー層を施工しました。水平を確かめ、効果的に排水できるように勾配をつけました。打ち固めた後の石灰コンクリート層の平均厚さは17.8cm、高くなっている端は最大厚み22.8cm、低い端の最小厚みは12.7cmでした。細かいひびなどを取り除くために、2回目のグラウチング（注入）作業の後で、すべての場所での水硬化を確かなものとするために、打ち固める作業が一週間続けられました。端部分をゴラ（黄麻の粗布）でふさぎました（水平のテラス表面と垂直の手すりの接合部に水が溜まってしみ込まないようにするために、角をまるくしてなめらかにカーブをつけました）。そして30日間、ひび割れを防ぐために屋根全体を湿った麻袋で覆いました。テラス屋根の工事は、区画ごとに行い、それぞれの決められた区画に正しい傾斜が付けられていることを確認しつつ行いました。



混合前のレンガ破片と焼成石灰（クッピー）。必要な勾配をつけるために敷設。



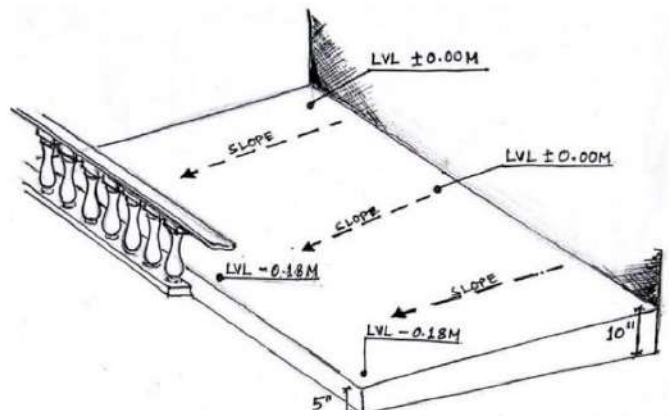
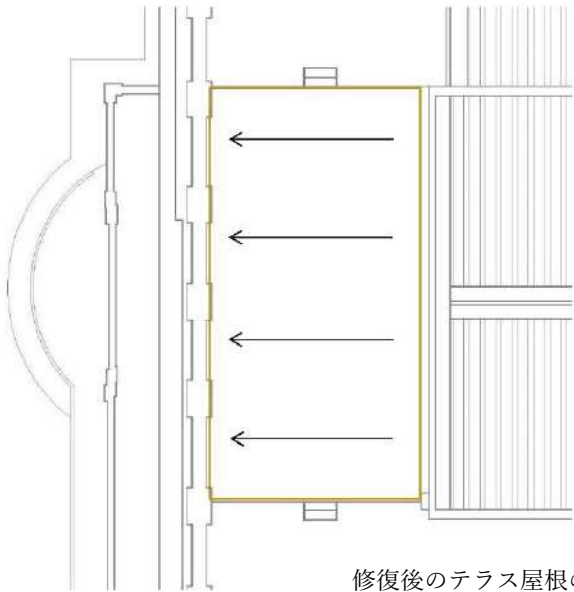
2層目のクッピー層が敷設されると、木製またはアルミ製部材で水平にし、さらに打ち固めて平らにしました。



テラス屋根は木製の棒（クルチ）で打ち固めます。



楕円形部屋のマドラス風テラス屋根の石灰コンクリート層が完成しました。



修復後のテラス屋根の傾斜方向と厚みの違いを示すスケッチ図。



テラス屋根のへり部分は、ゴラ（黄麻の粗布）でふさぎました。

モンゴル



モンゴルにおける新発見の文化遺産遺跡

ムンフトルガ・リンチンホロル 研究員
モンゴル科学アカデミー 歴史考古学研究所

ルーン文字の碑文が刻まれたイヴデイン・ゴルの鹿石

2015年夏、モンゴルとアメリカの共同プロジェクト「北モンゴル」調査隊は、シングド川の支流イヴデイン・ゴル川の流域で、一体の鹿石を発見しました。調査隊の一員でモンゴル文化遺産センター所属の専門家ブレンダグズ氏が、鹿石に刻まれているのは古代碑文であり古代チュルク族のルーン文字であると最初に確認しました。

2016年10月5日、ブレンダグズ氏は、この新発見の鹿石の写真数枚を提供して下さいました。そして、筆者はこの写真をもとに、一部ではありますが、最初の碑文解釈の論文を発表しました。2017年3月2日ブレンダグズ氏と共に、碑文発見の場所へ行き、初めて複雑な碑文の記録を取りました。

鹿石は、ホシン・ウズール山の前面に位置しています。立てると下部は68×30×14cmの大きさです(図1)。上部は11×32×15.5cmで、下部よりも99cm東に位置していました(図2・4・5)。鹿石の上部の記録中に、西面に刻まれた線を見つけました(図3)。ルーン文字の碑文が刻まれたイヴデイン・ゴルの鹿石は、疑いなく危険な状態でした。2017年8月26日に、地方政府文化センター職員のチンバット氏から聞いた話では、私たちの調査の後で、数人の地域住民が、何かを探して鹿石の下を掘っていたらしいのです。



図1 イヴデイン・ゴルの鹿石下部
(南方向から)



図2 前面から見た鹿石上部



図3 右側から見た
鹿石上部



図4 鹿石裏面



図5 鹿石左側



図6 碑文の記録作成

ウヴル・ハダン・フシューの岩面線画



図7 ウヴル・ハダン・フシューの岩面線画のある遺跡

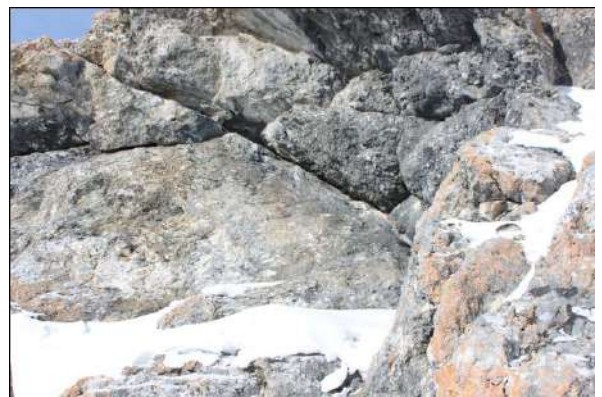


図8 岩面線画のある崖



図9 レッド・オーカー (赤褐色顔料) で描かれた線画

2017年3月2日、チンバット氏がイヴダイン・ゴルの鹿石へと案内してくれた時に、チャンサム山の南端にあるハダン・フシューという丘の前肩の崖にある、赤褐色の岩面線画を見せてくれました(図7・8)。2個の四角形の枠線と人の姿が崖の荒い岩面に描かれていました(図9)。上部の四角形の大きさは、 $24.5 \times 23.5\text{cm}$ で、枠線の太さは $1 \sim 1.5\text{cm}$ でした。四角形内部は、水玉のような形の紋様で満たされていました。立っている人の大きさは、 $13.5 \times 9.7\text{cm}$ で、上部の枠線から中心線に沿って 5.2cm 下に描かれていました。もう一つの四角形は、 $23.5 \times 23\text{cm}$ の大きさで、人から 6cm 左にあり、線の太さは 1cm で内部に点などは描かれていませんでした。技巧と形式の特徴から、ウヴル・ハダン・フシューの岩面線画は、青銅器時代に描かれたと思われます。

ツーノンジン・アムの岩面線画遺跡

2017年7月7日、筆者らはゴビアルタイ県エルデンのツーノンジン・アムという場所で、岩面線画遺跡を発見しました（図10）。その場所は、モンゴル・アルタイ山脈の南端にある山の前面に位置していました。ザルマンジン・ゴビの砂漠地帯はその遺跡の南から始まっていた。



図10 ツーノンジン・アム遺跡と線画の描かれた岩石

そこには、多数の巨石があり、石の表面には人間、ラクダ、アイベックス（野生のやぎ）、野生のロバ、ガゼル、キツネなどが多数描かれていました（図11~16）。描写方法、様式、描かれている場面などから、遺跡は青銅器時代のものである可能性が高いようです。ツーノンジン・アム遺跡では、狩りの場面と、今もその地域に生息している野生動物がおもに描かれていました。



図11 線画のある岩石（南西方向から）



図12 岩石の頂上部（南東方向から）



図13 上から見た岩石の頂上部



図14 線画のある岩石



図 15 アイベックスとガゼル



図 16 ラクダの競争か？

フルサナ・アムの碑文と岩面線画



図 17 フルサナ・アムの碑文（南方向から）

2017年7月7日、ツーノンジン・アムの岩面線画を記録した後で、2015年7月5日にルーン文字碑文が発見されたフルサナ・アムでも作業をしました。2年前に発見された後も、碑文の記録などがされていなかったからです。

碑文は、ほとんど立方体をした平面 $124 \times 108\text{cm}$ の岩石の南面に刻まれていました（図 17）。岩石の高さは、76cm ありました。平らな表面の右上部に5個のルーン文字が単線で刻まれていました。その幅は72cmで、高さは56cmでした。線は約40.5cmの長さでした。最も

大きい「a」という文字は、縦11.4cm、横9cmでした。線の11cm下に、以前の調査では確認できなかった、ウイグル期に特徴的なタムガと称される印章を見つけました。タムガは約 $11 \times 11\text{cm}$ の大きさでした。このタムガは、碑文が、チュルク期または初期ウイグル期に関連があるのではなく、8世紀後半から9世紀初期のものであるという証拠になるかもしれません。



図 18 碑文の記録作成（東方向から）



図 19 フルサナ・アムの碑文（西方向から）

タルニン・ゴル川岸の製陶用窯



図 20 南から見たタルニン・ゴル川土手の窯業遺跡



図 21 窯跡の痕跡と川

2001年、筆者がまだ国立モンゴル大学の学生だった時に、ウブルハンガイ県バードのタルニン・ゴル川の西支流の北部土手の溝で、土器片を発見しました（図 22）。そして 2006 年と 2007 年には、日本人研究者とモンゴル人研究者をその場所に案内しました。

2017 年 7 月 15 日に、筆者は上記の溝を含む地域を調査し、土器片をいくつか拾い集めました。この地域を流れる川の北岸は、いきなり高さ約 20m の高台へと続いています（図 20・24）。この高台の斜面には、黒い点が上から下へと垂直に流れる線のように続いています。それは、焦げた土と焼成粘土により出来ており、かつての窯の痕跡に違いありません。また、黒い点の付近には、土器片が多数散らばっていました（図 22・23）。黒い点と破片の分布状況から、ここには少なくとも 5 基の窯があったと考えられます（図 20）。



図 22 下から見た土器片のある溝



図 23 上から見た高台の斜面と川

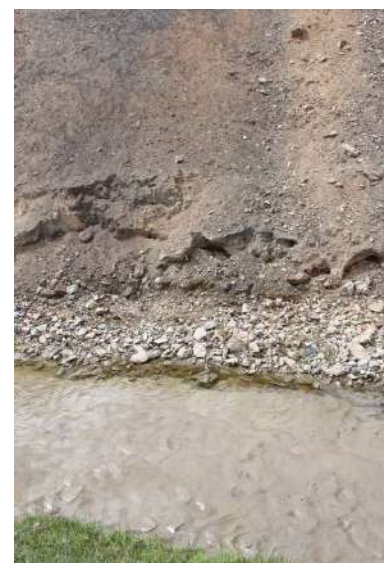


図 24 川と高台の下部



図 25 粘土におおわれた川底



図 26 小石におおわれた川底

集めた破片を分類すると、この遺跡で製作された土器は、ほんの数種の器種だけ（多くとも 8 種類）であることがわかりました（図 29~31・37）。この遺跡の窯で製作された土器は、型式、大きさ、模様などの特徴が似通っており、窯が離れた場所にあっても、出土土器は大体が同型でした。窯はある特定の目的がって使用され、ほんの短期間のみ

使用されたと思われます。特別な模様のある蒸し器や大型土器などからわかることは、タルニン・ゴルの窯は、匈奴期（紀元前 4 世紀~1 世紀）に属し、特に紀元前 1 世紀ごろのものである可能性が高いようです（図 29・34~36・38）。

窯本体の遺構は、何も見つかりません。上記の焦げた土の黒点のみです。過去 2000 年間、この窯跡は、タルニン・ゴル川のある南へと流れ落ちる、雨や雪解け水によって浸食されてきました（図 21・23・23）。また、家畜によっても破壊されてきました。地域住民の家畜は、川向こうにある牧草地に行くために、高台を通り抜けて行きました。そのような浸食と破壊によって、川底（高台のふもと部分の窯跡の下にあたる部分だけですが）は、窯からの粘土によってすっかり覆われていました（図 25・26）。川底にも土器の破片が見つかりました（図 25）。川底の粘土で覆われた部分は、1.8m から 6.7m の幅でした。川底の他の部分は、石で覆われていました（図 26）。

さらに、大小 2 つの穴の痕跡も見つかりました。それは、職人が粘土を取るために掘った穴でした。大きい方の穴は、平面不整楕円形（東西 27.5×南北 6.9m）で、深さ約 90cm。遺跡南東部の南の土手にありました（図 27）。小さい方の穴は、その北 7.2m にあり、南東~北西が長軸の平面不整楕円形（4.5×2.7m）で、深さ約 65cm でした（図 28）。



図 27 大きい方の穴（南東方向から）



図 28 小さい方の穴（南東方面から）

タルニン・ゴルの匈奴期の窯は、ある特定の目的のために使用されたと考えられますが、その地域の特権階級の匈奴のために使用された可能性があります。この遺跡から出土した土器の大部分が、大きさと様式の点で、匈奴の考古遺跡から出土した土器と酷似しています。特に、ボロー・ゴルの土手にあった居住区とノヨン・ウール山の墳墓から出土した土器とよく似ています。そのため、ボロー・ゴル居住区に住む職人が、ノヨン・ウール山の巨大な墓のために大型の土器を製作したのではないかと主張する学者もいます。窯はほんの短期間使用されただけかもしれませんが、タルニン・ゴルの川沿いに、窯職人の居住区があったという仮説をたてることもできます。



図 29-31 土器口縁部片



図 32-34 土器上部壁片

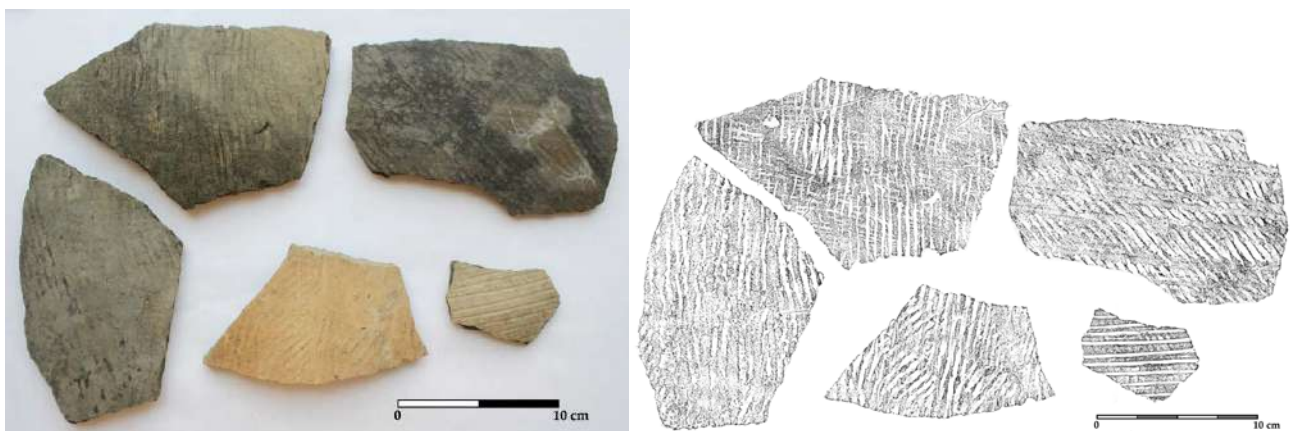


図 35・36 土器下部壁片



図 37 土器底部片



図 38 蒸し器の破片



図 39 遺跡敷地内の地域住民の家畜

フブスグル湖岸で見つかった土器の破片

2017年7月29日から8月2日にかけて、筆者は、サガングビー台地で古い土器の破片を見つけました。そこは、フブスグル県ハンフのフブスグル湖の最北端の湖岸にある台地です（図41）。その台地の上にあるツーリストキャンプ（ドルーン・ウル）敷地の南東角に、サウナ風呂建設のために穴が掘られました。掘りだした土は、積み上げられていましたが、そこで土器片を見つけました（図42）。穴は200×160cmの平面長方形で、深さ160cmありました（図44）。断面の土層は4層あり、土器片は、地表から約18cm下の暗茶色の上部2層から出土したようです。土器片は70点あり2種類に分類でき、ほか家畜の焼けた骨が31点、木炭などがありました（図43・45~50）。この土器片は、フブスグル湖の北岸で今までに見つかったものと同じ古代のものでした。



図 40 サガングビー台地（南方向から）



図 41 台地から見たフブスグル湖



図 42 土器片が見つかった東部の盛土（東方向から）



図 43 盛土から見つかった土器片



図 44 サウナのための穴（西方向から）

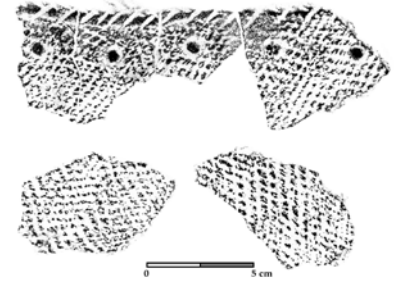


図 45・46 土器片



図 47・48 土器片



図 49 家畜の焼けた骨片



図 50 木炭

参考文献

1. Batbold 2014 – Н.Батболд. Монголын говийн бүсийн хадны зургийн судалгаа. Уб.
2. Burentugs 2017 – Г.Бүрэнтөгс. Умард Монголоос шинээр олдсон, руни бичээстэй буган хөшөө. // Оюуны хэлхээ. Vol. XVI, Fasc. 6. Уб.: 113-120
3. Mönhtulga / Ariyajav 2016 – R.Mönhtulga, B.Ariyajav. Moğolistan'da bulunan yeni bir yazıt: Hulsana Am Yazıtı / A newly-found inscription from Mongolia: The Khulsana Am Inscription. - Moğolistan'daki Türk Ayak İzleri / Turkic Footprints in Mongolia. Ulaanbaatar: 85-87

4. Munkhtulga 2015 – Р.Мөнхтулга. Хулсана амны руни бичээс. “Монгол сурвалж бичгийн судлал” олон улсын эрдэм шинжилгээний бага хурал. Улаанбаатар, 2015.08.21 - “Монгол сурвалж бичгийн судлал” олон улсын эрдэм шинжилгээний бага хурал. Илтгэлийн хураангуй. Уб.: 45-46
5. Munkhtulga 2016 – R. Munkhtulga. A newly found Runic inscription from Southwestern Mongolia. // ACCU Nara International Correspondent. The Sixteenth Regular Report. Vol. 16. Nara: 28-29
6. Munkhtulga 2017 – R. Munkhtulga. Ivdein Gol Deer Stone Runic Inscription. // Оюуны хэлхээ. Vol. XVI, Fasc. 6. Уб.: 109-112
7. Tseveendorj / Batsaikhan1994 – Д.Цэвээндорж, З.Батсайхан. Хүннүгийн ваар сав. // Studia Archaeologica. Tom. XIV, fasc. 5. Уб.: 76-107
8. Turbat et al. 2005 – Ц.Төрбат, Т.Батбаяр, Н.Пуса. Хүннүгийн үеийн Бороогийн суурингийн серамологийн судалгаа. // Acta Historica. Tom. VI, fasc. 1. Уб.: 5-23

ウズベキスタン



2015年~2016年のダルヴェルジン・テパ遺跡での新発見

アクマル・ウルマソフ 主任専門研究員

ウズベキスタン科学アカデミー 芸術学研究所

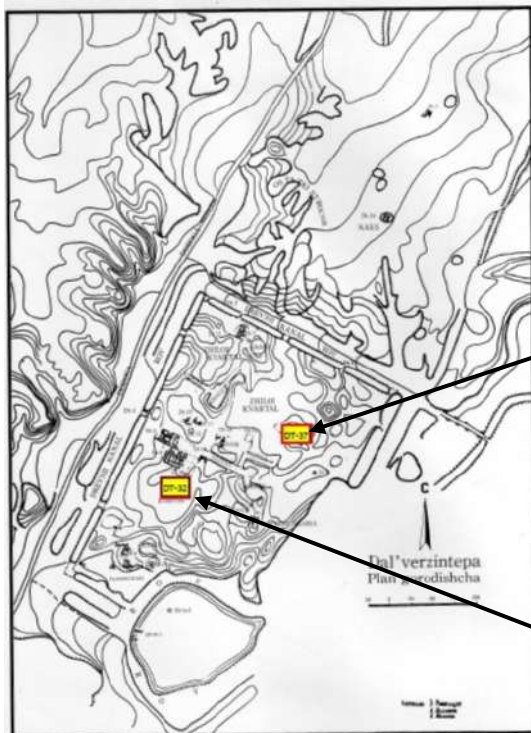
はじめに

ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所の考古調査隊は、著名な日本人研究者の加藤九祚氏と共にダルヴェルジン・テパ遺跡の考古学調査を実施しました。古代都市ダルヴェルジン・テパは、バクトリア王国における大都市の遺跡で、スルハンダリヤ州に位置しています。紀元前3世紀から2世紀にかけて、なだらかな丘の南側に最初に都市建設がはじまりました。クシャーナ朝（1世紀~3世紀）の時代になると、身分の高い人々や一般人の住居が建設されました。幹線道が交差する十字路口には、大きな仏教寺院があり、北には地元の人々が信仰する女神を祭る神殿がありました。都市の南西部には陶工らの居住地区がありました。また都市の外側には、市内よりも古い仏教寺院やゾロアスター教徒のための墓がありました。3世紀後半になると、都市はサーサーン朝の軍隊によって破壊されました。6世紀から7世紀にかけて、砦内の防護地域に人々が一時的に住むようになりました。都市を防御するための壁は、大小様々な大きさのレンガで建設されており、30基の塔があったことも今回の発掘調査で明らかになりました。その全長は2,500m、幅は10~15mありました。都市内の東部で偶然サウナ風呂を発見しました。サウナ施設の床は焼成レンガで作られており、テラコッタ製のパイプや排水口も見つかりました。

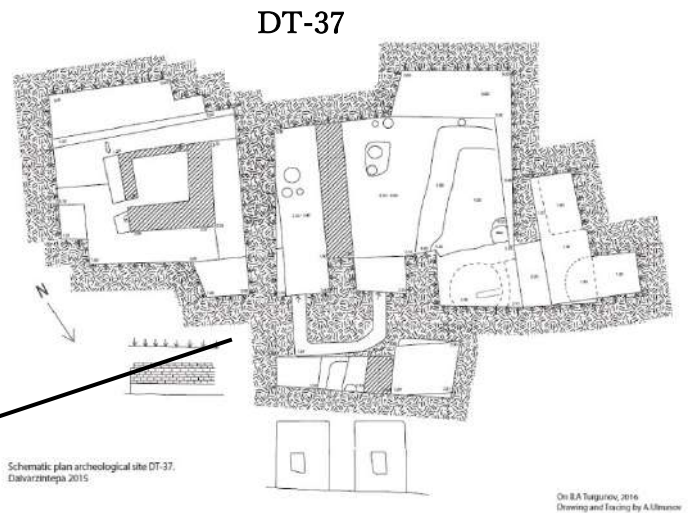


バクトリアの地図

DT-32 と DT-37 の発掘調査

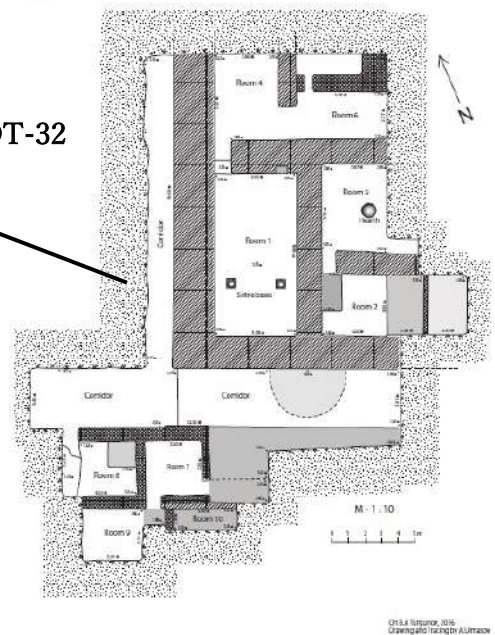


ダルヴェルジン・テパ考古遺跡の位置



Dal'verzintepa. DT-37

DT-32



DT-32 と DT-37 の平面図



第 1 室の二基の礎石

発掘調査は 2015 年から 2016 年にかけて実施されました。住居遺跡の中央部で約 20 室からなるクシャーナ朝時代の建物跡 (DT-37) が発見されました。その南西部には、おそらく裕福な人が所有していた家と思われる、数部屋からなる住居跡 (DT-32) もありました。その建物の中央広間は、平面 $9.35 \times 5.15\text{m}$ の大きさで、キャピタル (柱頭) の破片をはじめ、バクトリア王国に広く分布していた東方様式の大きな柱の礎石が見つかりました。この様式の礎石は、古代テルメズ遺跡やハルチャヤン遺跡などの建造物に多く見られます。

テラコッタ製のアンテフィックス（瓦端飾り）の破片から、建築の構成要素を突き止めることができるかもしれません。アンテフィックスやパルメット椰子およびアカンサスの葉の装飾は、屋根の縁飾りに用いられました。同じような装飾はハルチャヤン遺跡では多数確認されていますが、アイカナム遺跡、スルカクタル遺跡、クルテパ遺跡などではあまり多くありません。

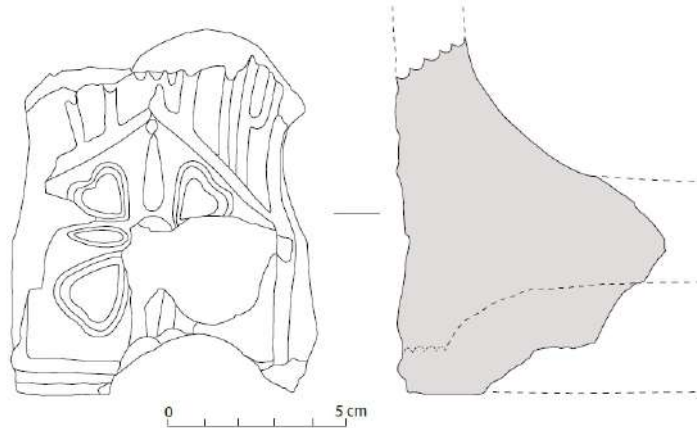


Fig. 7 c) Fragment of Antefix.

アンテフィックス（瓦端飾り）の破片

考古遺物

発掘調査で発見された主な遺物は、クシャーナ朝時代の洗練された陶磁器です。例えば、装飾のほどこされた水差し、灰色粘土製のアンフォラ（両取手付き壺）、釜、壺、大椀、ガラス瓶、ガラス容器、皿、その他台所用具などです。ある建物内で、数個の「ハム」といわれる大型の壺が1列に並んでいるのを発見しました。ハムとは大型の壺で中央アジアに広く分布し、穀類、米、ワイン、水などの貯蔵に用いられていました。



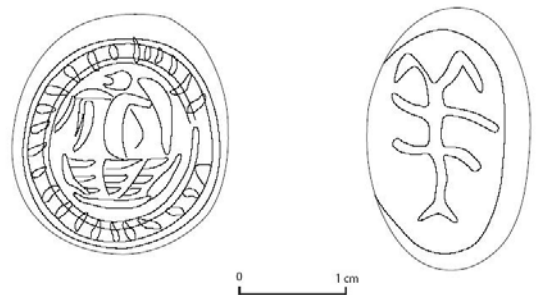
刻印のある土器片



タムガ

発掘された陶磁器のほとんどは、水差しでした。破片から判断すると、片手付きのものと両手付きのものがあったようです。表面には、様々な刻印が残っているものもありました。その中に、なめらかな楕円形をした2種類の印章の刻印が重なっているものがありました。タムガ¹といわれる刻印とよく似たししが刻まれていました。

他の水差しの破片には、盾と刀（らしきもの）をもった船に乗った男が刻印されていました。男のまわりには、格子模様の縁取りがありました。これを描いた陶工は、番兵が船に乗って川を漂う姿と、都市の周囲を取り囲む水をたたえた堀を表現しようとしているようです。船が描かれた遺物は、ダルヴェルジン・テパでは初めて発掘されましたが、この地域の他の遺跡では発見されています。古代テルメズのカラテパ仏教遺跡からもたらされた粘土製の雄牛もありました。そして、その表面には船の形と共に楕円形が刻印されていました。雄牛がアムダリヤ川の土手に位置していることから、特定の軍事目的をもった輸送船が川を下っているところを表現していると、研究者は推理しています。



浮かんでいる船が描かれている印章の刻印

遺物の中で、特に注目されたのは、テラコッタ製の小立像です。女性の彫像が大半を占めていました。女性は、全身立像もしくは長い衣服を着た坐像として造形され、美しい髪型に、変わった頭飾りをつけ、手の指を握った姿です。ほかに、手にいろいろな物をもっている姿もありました。

¹ タムガとは、ユーラシア大陸の遊牧民とその影響を受けた文化圏の人々が使用した抽象的な紋様の刻印もしくは印章である。タムガは通常特定の部族や氏族および家族集団の表象であり、古典古代から中世にかけて、ユーラシア大陸の遊牧民（アラーン、モンゴル、サルマティア、チュルク語系諸族を含む）に広く用いられていた。出典：www.wikipedia.org



ダルヴェルジン・テパのテラコッタは、その地方特有の美術的伝統に従って創作されていますが、ヘレニズム文明の影響も受けていました。この小立像は様々な宗教と関係があり、住民の精神的な世界観を反映しています。中には、手作りの焼き物で赤い塗料(アンゴベ)が塗られた、型どおりの英雄像もありました。小立像の衣服は、細かいところまで巧みに表現されており装飾も素晴らしく、当時の職人の技術と知恵を今に伝えています。

テラコッタ小立像

発掘では、オイルランプ、手紡ぎ用の紡錘、青銅鏡、小さなガラス容器、動物の骨製品、硬貨など多くの遺物が発見されました。クシャーナ朝の歴代の王の命によって鑄造された、おびただしい数の青銅貨や銅貨は、商品と貨幣の交換関係がその地域に成立し、総じて経済発展に寄与していたことの証拠と言えるでしょう。



ガラス製瓶



紡錘溝車

金属製品の中では、丸い輪のつまみをハンダ付けした銅貨の印章は、珍しく大変興味深いものでした。というのもこの銅貨はウィマ・カドフィセス王(クシャーナ朝の王のひとりで、およそ紀元90年から100年まで在位)のものだからです。



ウィマ・カドフィセース王の銅貨の印章

考古遺物の中で特に重要なのが、有角の鹿形の取っ手がついた金属製の燭台です。この芸術性豊かな燭台は、芳香性植物を燃やす際に用いられたと思われます。例えば、ペガヌム・ハルマラ(シリアン・ルエともいわれる)などの薬草は、特別な儀式の際に魔術効果のために用いられました。ダルヴェルジン・テパ遺跡で、動物の取っ手がついた燭台がはじめて発見されましたが、バクトリアの他の遺跡では見つかりません。しかし、この燭台とよく似たデザインのものでイランから出土しています。パルティアのアルサケス朝(紀元前2世紀~紀元2世紀)のもので、唯一の違いは、イラン出土の燭台には、鹿ではなくグリフィン(ライオンの胴体に鷲の頭と翼をもつ想像上の怪物)の取っ手がついていることです。



角のある鹿の取っ手(金属製)がついた燭台

他には、優美な小さいガラス容器が見つかりました。多分、薬品や香水を入れるために用いられたものです。そこに住む人々がそれを必要としたということから、高度な文化と成熟した美的感覚をもっていたことがわかります。



化粧箱に描かれたヒッポカンポス

発掘された遺物としてほかに、論文などで化粧箱やおしろい（白粉）箱と呼ばれるものがありました。これは、黒ステアタイト（滑石）から巧みに作られていますが、円盤形の中心には想像上の動物が描かれています。胴体は蛇で翼があり、鱗のある魚の尾をもっています。そして、首と前足は馬のようです。発掘された浮き彫りでは、右前足と翼上部が欠損していました。

ダルヴェルジン・テパ遺跡とそれ以前の遺跡では、石版にはヒッポカンポス（魚の尾を持つ海馬）が描かれていました。円盤の上部は手作りで、大理石に似た石灰石に浅浮き彫りで、人が乗ったヒッポカンポスが描かれていました。研究者によれば、この化粧箱は、近隣ガンダーラの歴史文化地域からの出土遺物と類似し

ているということです。当時ガンダーラはバクトリア王国と近い関係を築いていました。ギリシア神話では、ヒッポカンポスは魚の尾をもつ海馬であり、魚の王様と見なされており、鯨に等しいとも考えられていました。ヒッポカンポスは、クシャーナ朝時代の中央アジア美術に固有の造形であり、馬と蛇または馬と竜が合体した姿で表現されていました。

石製の化粧箱は、タジキスタンのクシャーナ朝時代の遺跡でも見つかっています。また、様々な形をした化粧箱は紀元前1世紀から紀元1世紀のタキシラの発掘調査でも多数見つかっています。ガンダーラでは、石版はヘレニズム美術の影響を受けており、描かれる場面は異なっています。例えばガンダーラの石版では、トリトン（半身半魚の神）が蓮の花で飾られた玉座に座り、ケトス（海の怪物）が翼のある馬に乗っている姿が描かれています。しかし、ここで発掘した円盤の上に描かれていたのは、祝宴の場面や想像上の生き物（おもにヒッポカンポス）そして馬や海の怪物に乗るネレイデス（海の女神達）などです。

最後に

ダルヴェルジン・テパ遺跡で発掘された珍しい遺物の数々から、古代のこの地域において、都市計画、応用芸術、工芸品、国際的交易、文化的つながりなどが発展していたことがわかります。そして、ダルヴェルジン・テパは古代バクトリア王国における社会政治上の中心であり、また高度な都市文化の中心でもあったことがうかがわれます。

参考文献

1. Litvinsky B.Ya., Sedov A.V. Tepai-Shah. Kultura i svyazi Kushanskoy Baktrii.– “Nauka”. Moskva, 1954. - S. 143-144, ris. 57/1.
2. Peters B.G. Izobrajenie korablya na bulle iz Karatepe. // Buddiyskie kompleksi v Starom Termeze (Kara-Tepe VI). - Moskva: "Nauka", 1996. - S. 213-220.
3. Pugachenkova G.A. Khalchayan. Problemi khudojestvennoy kulturi Severnoy Baktrii. - Tashkent, 1966. - 285 s.

4. *Pugachenkova GA, Rtveldze E.V.* Dalverzintepa – kushanskiy gorod na yuge Uzbekistana. - Tashkent: Fan, 1978. - 240 s.
5. *Turgunov B., Ulmasov A.* Dalvarzintepa: tadqiqot va toplilmalar // J. "Moziydan sado". - Toshkent, 2017. №2. - 25-27 betlar.
6. *Ulmasov AF* Holchayandan nomalum antefikslar // J. San'at. - Toshkent: "San'at", 2010. №4. - 6-8 betalar.
7. *Ulmasov A.F.* Novie naxodki kamennix baz antichnogo vremeni na Khalchayane. // Materiali khudojestvennoy i materialnoy kulturi Uzbekistana. Tashkent, 2014. - S. 103-119.
8. Gandhara and Silk Road Arts. The Hiroyama Ikuo Collection // Catalog of the Exhibition. Asahi Shimbun. - Tokyo, 2000. - P. 40. Cat. No 76.
9. *Marshall, John S.* Taxila. An Illustrated account of Archeological Excavations. Cambridge University Press, 1951. Vol. II, p. 493; Vol. III, pl. 144-146, p. 193-194.